

## 基礎看護学実習における学生自己評価と 教員評価の比較検討

A Comparison between the Evaluation of Students  
by Themselves and by Teachers of Fundamental Nursing Practice

河合富美子 草川 好子 中村 可奈  
松下 正子 川出富貴子

**【要約】**基礎看護学実習の評価基準の検討資料とするために、教員評価と学生の自己評価の関係を評価基準別に一致度・不一致度を検討した。ふれあい看護実習IIについては総合評価を基礎看護実習I・IIについては実習目標、実習態度別に評価を検討した。

学生自己評価と教員評価の全体の一致率は、ふれあい看護実習IIでは58.9%、基礎看護実習Iでは実習目標44.1%・実習態度55.7%、基礎看護実習IIでは実習目標42.8%・実習態度48.4%であった。不一致率はすべての領域において、学生自己評価より教員評価が有意に高値を示した。

**【キーワード】** 実習評価, 学生自己評価, 教員評価, 一致度, 不一致度

### I. はじめに

本学のカリキュラムは、学生自身の自律性 (Autonomy) を尊び、対象が暮らす地域の特性、伝統 (Tradition) を理解し、人間性豊か (Humanity) に看護活動を展開する能力を身につけることを目的に構成されている。その中で自律性 (Autonomy) 育成の一環として、クリティカルシンキングを視野に入れ、専門科目の全領域の一部にテュートリアル方式の少人数制学習方式 Inquiry Based Learning (以下IBLと略する) を導入している。学生の主体性を育て、自己の学習を振り返り客観的にみるという意味からも、「評価」への学生の参加は有用と考えられ、特に、実技を伴う実習への「学生の自己評価」に関する報告<sup>1-3)</sup>は多くみられている。

本学の基礎看護学実習は、ふれあい看護実習I・II、基礎看護実習I・IIで構成されている。したがって、

表1に示す5段階実習の第I・II段階として位置づけられている。第I段階では、ライフステージの視点から地域に暮らす生活者として対象を捉えるために、ふれあい看護実習Iでは保育所および小学校で、ふれあい看護実習IIでは市町村において実習を行っている。第II段階では、第I段階の実習を踏まえ、ライフステージと健康レベルの視点から、対象を総合的に理解するために医療施設にて実習を行っている。評価については「教員による他者評価」の他に、「学生の自己評価」を導入している。

本報では、今後の評価基準の検討資料とするために、基礎看護学実習における教員評価と学生の自己評価について評価基準別に一致度・不一致度を検討した。一致度・不一致度は、ふれあい看護実習IIについては総合評価を基礎看護実習I・IIについては実習目標、実習態度別に評価を検討した。

表1 実習のステップ

段階	実習時期	実習科目	単位数
第Ⅰ段階	1年次前期	ふれあい看護実習Ⅰ	1
	1年次後期	ふれあい看護実習Ⅱ	1
第Ⅱ段階	2年次前期	基礎看護実習Ⅰ	1
	2年次後期	基礎看護実習Ⅱ	1
第Ⅲ段階	3年次後期から	母性看護実習	2
		ホスピスケア実習	1
	4年次後期	小児看護実習	2
		成人看護実習	2
		老人看護実習	2
		精神看護実習	2
地域看護実習	2		
第Ⅳ段階	4年次前期	ケアシステム実習	2
第Ⅴ段階	4年次前期	看護総合実習	4
選 択	4年次後期	助産実習	5

## II. 方 法

評価のための観察場面は次の3種である。すなわち、ふれあい看護実習Ⅱ、基礎看護実習Ⅰおよび基礎看護実習Ⅱである。ふれあい看護実習Ⅱの場面は平成9年度、平成10年度、基礎看護実習Ⅰ・基礎看護実習Ⅱの場面は平成10年度に観察した。

ふれあい看護実習Ⅱでの被観察者は平成9年度99名、平成10年度99名、合計198名の学生であり、観察者は平成9年度40名、平成10年度は33名の教員であった。教員は平成10年度33名のうち31名は平成9年度と同一人であるが、2名は新たに加わった。

基礎看護実習Ⅰでの被観察者は95名の学生であったが、被観察学生の95名のうち1名は、実習欠席のため対象から除外し、94名とした。観察者は39名の教員であった。

基礎看護実習Ⅱでの被観察者は94名の学生であったが、実習を欠席した2名を除外し、92名を対象とした。観察者は38名の教員であった。

3つの観察場面共に実習場所には学生が4～5名ずつグループになり、各グループに教員が1～2名ずつ配置された。被観察者の学生と観察者の教員とが基礎看護実習Ⅰと基礎看護実習Ⅱとで同一の組み合わせとなったのは7ペアであり、学生33名、教員16名であった。基礎看護実習Ⅰと基礎看護実習Ⅱとで異なった組み合わせとなったのは2ペアであり、9名の学生と4名の教員であった。残りの11ペアは観察教員1名がふれあい看護実習Ⅱと基礎看護実習Ⅰとで同一学生とペアとなった。

評価内容は3つの観察場面で異なった。ふれあい看護実習Ⅱでの評価項目は6項目、基礎看護実習Ⅰでの評価項目は、実習目標が4項目、実習態度が3項目の計7項目であった。基礎看護実習Ⅱでの評価項目は実習目標が5項目、実習態度が2項目の計7項目であった。本報の評価は被評価学生の自己評価と評価教員による他者評価よりなる。すなわち、各場面の評価項目について、被評価学生がA～Dの4段階、すなわち、A=たいへん良くできた(80～100)、B=よくできた(70～79)、C=できた(60～69)、D=できなかった(60未満)の自己評価を行い、次いで評価教員が同様にA～Dの評価を行った。

学生の自己評価と教員評価を組み合わせ、両者評価の一致している組み合わせを一致群とし、AA、BB、CC、DDとした。それ以外の組み合わせを不一致群とした。また、一致度をAAにおいてはA率、BBにおいてはB率、CCにおいてはC率で表した。有意差検定には百分率のt検定を用い、5%以下を有意判定とした。

## III. 結 果

ふれあい看護実習Ⅱにおける平成9年度の学生自己評価と教員評価との関係を表2に示した。ふれあい看護実習Ⅱの学生自己評価と教員評価の全体の一致度は58.9%、不一致度は41.1%であった。学生自己評価からみた教員評価との評価段階別一致度は、A率は75.8%、B率は56.1%、C率は6.3%、教員評価からみた学生評価との評価段階別一致度は、A率は59.1%、B率は63.1%、C率は16.0%であり、A率において0.1

表2 平成9年度ふれあい看護実習Ⅱにおける学生自己評価と教員評価との関係

		学 生 評 価				計	一致度 % <sup>1)</sup>
		A	B	C	D		
教 員 評 価	A	194	109	23	2	328	59.1
	B	52	152	37	0	241	63.1
	C	10	10	4	1	25	16.0
	D	0	0	0	0	0	0.0
計		256	271	64	3	594	
一致度 % <sup>2)</sup>		75.8*	56.1	6.3	0.0		58.9

1) 教員評価に対する学生自己評価の一致度 \* p < 0.001  
2) 学生自己評価に対する教員評価の一致度

表3 平成10年度ふれあい看護実習IIにおける  
学生自己評価と教員評価との関係 N=99

		学 生 評 価				計	一致度 % <sup>1)</sup>
		A	B	C	D		
教 員 評 価	A	247	83	6	0	336	73.5
	B	71	144	25	0	240	60.0
	C	4	5	8	1	18	44.4
	D	0	0	0	0	0	0.0
計		322	232	39	1	594	
一致度 % <sup>2)</sup>		76.7	62.1	20.5	0.0		67.2

- 1) 教員評価に対する学生自己評価の一致度  
2) 学生自己評価に対する教員評価の一致度

%以下の危険率で有意に教員評価が高かった。

ふれあい看護実習IIにおける平成10年度の学生自己評価と教員評価との関係を表3に示した。ふれあい看護実習IIの学生自己評価と教員評価の全体の一致度は、67.2%、不一致度は32.8%であった。学生自己評価からみた教員評価との評価段階別一致度は、A率は76.7%、B率は62.1%、C率は20.5%であった。教員評価からみた学生評価との評価段階別一致度は、A率は73.5%、B率は60.0%、C率は44.4%であったが、A、B、C率すべてにおいて学生自己評価と教員評価間に差はみられなかった。

ふれあい看護実習IIにおける平成9年度、平成10年度の学生自己評価と教員評価の不一致度を表4に示した。不一致度の程度をみると、平成9年度では、不一致度41.1%のうち学生より教員の評価が高い場合はそのうちの29.0%、学生より教員の評価が低い場合は12.1%であった。平成10年度では、不一致度32.9%のうち学生より教員の評価が高い場合は19.4%、学生よ

表4 ふれあい看護実習IIにおける不一致度

		学 生 評 価				計	不一致度 (%)
		A	B	C	D		
H 9 年 度	学生より教員 が上位評価	—	109	60	3	172/594 <sup>1)</sup>	29.0 **
	学生より教員 が下位評価	62	10	0	—	72/594 <sup>1)</sup>	
H 10 年 度	学生より教員 が上位評価	—	53	37	2	115/594 <sup>1)</sup>	19.4 *
	学生より教員 が下位評価	25	6	1	×	88/594 <sup>1)</sup>	

- 1) 全評価項目数 \* p < 0.01 \*\* p < 0.001

り教員の評価が低い場合は13.5%であった。平成9年度では0.1%以下の危険率で、平成10年度では1%以下の危険率で、学生自己評価より教員評価が有意に高値を示した。

基礎看護実習Iにおける平成10年度の実習目標についての学生自己評価と教員評価の関係を表5に示した。実習目標達成に対する学生自己評価と教員評価の全体の一致度は44.1%、不一致度は55.9%であった。学生評価からみた教員評価との評価段階別一致度は、A率は56.5%、B率は53.1%、C率は20.4%であった。教員評価からみた学生評価との評価段階別一致度は、A率は36.9%、B率は49.7%、C率は43.8%であった。

表5 平成10年度基礎看護実習Iにおける実習目標についての学生自己評価と教員評価との関係 N=94

		学 生 評 価				計	一致度 % <sup>1)</sup>
		A	B	C	D		
教 員 評 価	A	52	66	23	0	141	36.9
	B	32	93	59	3	177	49.7
	C	8	16	21	3	48	43.8*
	D	0	0	0	0	0	0.0
計		92	175	103	6	376	
一致度 % <sup>2)</sup>		56.5*	53.1	20.4	0.0		44.1

- 1) 教員評価に対する学生自己評価の一致度 \* p < 0.01  
2) 学生自己評価に対する教員評価の一致度

このうち、A率は1%以下の危険率で有意に学生自己評価に比して教員評価が高値を示し、C率は1%以下の危険率で有意に学生評価に比して教員評価が低値であった。

基礎看護実習Iにおける実習態度についての学生評

表6 平成10年度基礎看護実習Iにおける実習態度についての学生自己評価と教員評価との関係(3項目) N=94

		学 生 評 価				計	一致度 % <sup>1)</sup>
		A	B	C	D		
教 員 評 価	A	115	53	17	0	185	62.2
	B	26	36	20	0	81	44.4
	C	1	6	6	2	15	40.0*
	D	0	0	1	0	1	0.0
計		141	95	44	2	282	
一致度 % <sup>2)</sup>		81.6*	37.9	13.5	0.0		55.7

- 1) 教員評価に対する学生自己評価の一致度 \* p < 0.001  
2) 学生自己評価に対する教員評価の一致度

価と教員評価の関係を表6に示した。実習態度に対する学生自己評価と教員評価の全体の一致度は55.7%，不一致度は44.3%であった。学生評価からみた教員評価と評価段階別一致度は，A率は81.6%，B率は37.9%，C率は13.5%，教員評価からみた学生自己評価との評価段階別一致度は，A率は62.2%，B率は44.4%，C率は40.0%であった。このうちA率は教員評価が学生自己評価に比して0.1%以下の危険率で有意に高値であり，C率は教員評価が学生評価に比して0.1%以下の危険率で有意に低値であった。基礎看護実習Iにおいて実習目標と実習態度の学生自己評価と教員評価の不一致度を表7に示した。不一致の程度をみると，実習目標においては不一致度55.9%のうち学生より教員の評価が高い場合は41.0%，学生より教員の評価が低い場合は14.9%であった。実習態度においては不一致度44.3%のうち学生より教員の評価が高い場合は32.6%，学生より教員の評価が低い場合は11.7%であり，実習目標および実習態度ともに0.1%以下の危険率で教員評価が学生自己評価に比して有意に高値であった。

表7 基礎看護実習Iにおける不一致度

		学 生 評 価				計	不一致度 (%)
		A	B	C	D		
実習目標	学生より教員が上位評価	—	66	82	6	154/376 <sup>1)</sup>	41.0
	学生より教員が下位評価	40	16	0	—	56/376 <sup>1)</sup>	14.9
実習態度	学生より教員が上位評価	—	53	37	2	92/282 <sup>1)</sup>	32.6
	学生より教員が下位評価	25	6	1	×	33/282 <sup>1)</sup>	11.7

1) 全評価項目数

\* p < 0.001

基礎看護実習IIにおける平成10年度の実習目標についての学生自己評価と教員評価の関係を表8に示した。実習目標達成に対する学生自己評価と教員評価の全体の一致度は42.8%，不一致度は57.2%であった。学生自己評価からみた教員評価との評価段階別一致度は，A率は62.1%，B率は49.8%，C率は24.1%であった。教員評価からみた学生自己評価との評価段階別一致度は，A率は28.0%，B率は52.1%，C率は53.8%であった。このうち，A率は教員評価が学生自己評価に比して0.1%以下の危険率で有意に高値であり，C率は教

表8 平成10年度基礎看護実習IIにおける実習目標についての学生自己評価と教員評価との関係(5項目) N=92

		学 生 評 価				計	一致度 % <sup>1)</sup>
		A	B	C	D		
教員評価	A	49	88	35	3	175	28.0
	B	26	113	73	5	217	52.1
	C	4	25	35	1	65	53.8*
	D	0	1	2	0	3	0.0
計		79	227	145	9	460	
一致度 % <sup>2)</sup>		62.1*	49.8	24.1	0.0		42.8

1) 教員評価に対する学生自己評価の一致度

\* p < 0.001

2) 学生自己評価に対する教員評価の一致度

員評価が学生自己評価に比して0.1%以下の危険率で有意に低値であった。

基礎看護実習IIにおける実習態度についての学生自己評価と教員評価の関係を表9に示した。実習態度に対する学生自己評価と教員評価の全体の一致度は48.4%で，不一致度は51.6%であった。学生自己評価からみた教員評価との評価段階別一致度は，A率は81.7%，B率は34.6%，C率は30.0%，D率は16.7%であった。

表9 平成10年度基礎看護実習IIにおける実習態度についての学生自己評価と教員評価との関係(2項目) N=92

		学 生 評 価				計	一致度 % <sup>1)</sup>
		A	B	C	D		
教員評価	A	49	46	7	1	103	47.6
	B	11	27	19	2	59	45.8
	C	0	5	12	2	19	63.2*
	D	0	0	2	1	3	33.3
計		60	78	40	6	184	
一致度 % <sup>2)</sup>		81.7**	34.6	30.0	16.7		48.4

1) 教員評価に対する学生自己評価の一致度

\* p < 0.02

2) 学生自己評価に対する教員評価の一致度

\*\* p < 0.001

教員評価からみた学生評価との評価段階別一致度は，A率は47.6%，B率は45.8%，C率は63.2%，D率は33.3%であった。このうち，A率は教員評価が学生自己評価に比して0.1%以下の危険率で有意に高値であり，C率は教員評価が学生自己評価に比して2%以下の危険率で有意に低値であった。基礎看護実習IIにおける実習目標と実習態度の学生自己評価と教員評価の不一致を表10に示した。不一致の程度をみると，実習目標においては不一致度57.2%のうち学生より教員の

表10 基礎看護実習IIにおける不一致度

		学生評価				計	不一致度 (%)
		A	B	C	D		
実習目標	学生より教員が上位評価	—	88	108	9	205/460 <sup>1)</sup>	44.6
	学生より教員が下位評価	30	26	2	—	58/460 <sup>1)</sup>	12.6
実習態度	学生より教員が上位評価	—	46	26	5	77/184 <sup>1)</sup>	41.8
	学生より教員が下位評価	11	5	2	—	18/184 <sup>1)</sup>	9.8

1) 全評価項目数

\* p < 0.01

評価が高い場合は44.6%，学生より教員の評価が低い場合は12.6%，1%以下の危険率で教員評価が学生の自己評価より有意に高値を示した。実習態度では不一致度51.6%のうち学生より教員の評価が高い場合は41.8%，学生より教員の評価が低い場合は9.8%であったが、有意な差はなかった。

#### IV. 考 察

本学では、基礎看護学実習において1年次に実施する「ふれあい看護実習I・II」および2年次に実施する「基礎看護実習I・II」(表1)は、人間理解のベースとして、看護学の基礎に位置づけているため、実習には専門科目担当の全教員が関わっている。今後、大学としての一貫性のある適切な評価方法を検討する資料の一端として、教員評価と学生自己評価との関係の分析結果を本報に示した。

学生自己評価と教員評価の全体の一致率をみると、ふれあい看護実習IIでは58.9%，基礎看護実習Iでは実習目標44.1%・実習態度55.7%，基礎看護実習IIでは実習目標42.8%・実習態度48.4%であった。教師の評価は、学生の評価をみた上でなされたものであったが、一致率は43~59%の範囲の分布であり、半数前後の一致率ということから、学生自己評価からの影響は少ないと考えられた。しかし、今回の報告においてはそれを裏付ける要因まで言及するに至らなかった。

評価段階別一致率をみると、A率ではふれあい看護実習IIおよび基礎看護実習I，基礎看護実習IIの実習目標・実習態度ともに、教員評価が学生自己評価に比して有意に高率である。また、C率では、基礎看護実

習I，基礎看護実習IIの実習目標・実習態度ともに、教員評価が学生自己評価に比して有意に低値である。B率については、ふれあい看護実習II，基礎看護実習IIの実習目標，実習態度ともに有意な差はみられなかった。

学生自己評価と教員評価の不一致率では、学生自己評価が教員評価に比して高い場合より、学生自己評価が教員評価に比して低い場合が、ふれあい看護実習IIおよび基礎看護実習I，基礎看護実習IIの実習目標・実習態度ともに、有意に多いことが示された。学生自己評価と指導者評価には差がないという報告<sup>2)</sup>もあるが、一般的に学生自己評価に比して教員評価が高いと報告<sup>4)6)</sup>されており、本報の結果も基礎看護実習IIの実習態度以外はそれを裏付けるものとなっている。本報とは異なり、学生自己評価と指導者評価に差がみられない場合もあるが、その場合の指導者は学校の教員ではなく、病棟の臨床指導者である場合が報告されている<sup>2)</sup>。

評価結果を対比させる場合には、指導者が臨床指導者か教員か、また、そのいずれにおいても所属や経験、関わり方、また、学生のバックグラウンドの相違、評価で何をみるのかその評価基準の相違など変数が多く、単純に比較することはできない。本報においても、分析の対象とした「教員評価」と「学生自己評価」の評価に至るまでには、多くの変数が介在しており、問題点が多くみられた。すなわち、1) 評価の基準はA=たいへん良くできた(80~100)，B=よくできた(70~79)，C=できた(60~69)，D=できなかった(60未満)という提示のみで、具体的な基準が示されていなかった。そのため、被評価者側、評価者側ともに個別の判断尺度による主観評価として特徴づけられた。したがって、被評価者と評価者の組み合わせ状況は、他の組み合わせと同じとはいえない。2) 基礎看護I・IIの場面の評価項目で、例えば『患者とのコミュニケーションがとれた』という1つの評価項目に対して、患者との意志の疎通がはかれた、患者の情報が把握できた、患者との関係づくりができたなどの異なる複数の評価側面が示されており、この細項目の評点がそれぞれ異なる場合のルールが明示できていなかった。3) 教師の評価は、学生の評価をみた上でなされたものであり、学生の自己評価からの影響は避けられない、などである。しかし、多くの変数や問題を含みながら

も、学生は教員評価より低い自己評価をする傾向があり、看護婦の学生評価においても学生の自己評価が低いという同様な結果が出ている<sup>9)</sup>。

学生自己評価と教員評価のズレに影響する要因として、評価内容と評価基準の具体性の問題、自己評価が変動しやすく不安定で過小評価する青年期特有の傾向があげられている<sup>6)</sup>。また、教員からみると患者のことをよく把握し適切な看護を実践している学生は、低い自己評価をしており、逆にもう少し頑張っ欲しいと思う学生は高い自己評価をしているという報告もある<sup>4)</sup>。学生自己評価と教員評価が大きくズレる場合には、どこにズレがあるのか学生との面談などの個別対応も求められる。

本学における基礎看護方法で実施しているIBLでは、「教員による評価」および「学生の自己評価」の他に、「ピア評価（学生による他者評価）」を取り入れ、その妥当性が報告されている<sup>10)</sup>。今後、基礎看護学実習評価にピア評価の導入も含めて多角的な評価方法の検討が必要であると考え。

## 文 献

- 1) 野村志保子：基礎看護学実習 その2 聖隷クリスティーナ看護大学の場合，Quality Nursing, 2 (4), 322-330, 1996.
- 2) 小西小夜子，他：学生の実習評価の見直し—学生の自己評価と指導者評価との比較から—，看護管理, 4 (4), 242-245, 1994.

- 3) 横山美智子，他：実習に見られる学生の自己評価と教員の評価について，日本看護学教育学会誌, 5 (2), 74-75, 1995.
- 4) 射場典子，他：終末期実習における学生の自己評価と教員評価の比較—形成的評価を用いて—，日本看護研究学会雑誌, 18 (2), 60, 1995.
- 5) 満間信江，他：看護学生の臨床実習自己評価観点，第24回日本看護学会集録（看護教育），113-115, 1993.
- 6) 板川真弓，他：3年過程看護学生の臨床実習における評価について—自己評価と客観的評価のズレとその原因—，日本看護研究学会誌, 21 (3), 291, 1998.
- 7) 松村恵子，他：臨床実習における評価に関する研究（第5報）—学生の自己評価からの分析—，日本看護研究学会誌, 21 (4), 18, 1997.
- 8) 服部淳子，他：小児看護学実習における自己評価について—患児の特性別実習経験量による分析—，日本看護研究学会誌, 21 (4), 18-19, 1997.
- 9) 野々川ゆき：成人・老人看護学実習の指導に関する—考察—看護婦の自己評価と学生の自己評価より—，第25回日本看護学会集録（看護教育），43-46, 1994.
- 10) 辻川真弓：チュートリアル教育の評価方法の検討—ピア評価の妥当性について—，看護教育, 40 (5), 384-389, 1999.